

(平成14年2月1日受付)

所属：静岡県自然環境調査委員会委員（常葉環境情報専門学校）

氏名：松本雅道

標題：「生物多様性国家戦略の見直し」についての要望

「新・生物多様性国家戦略骨子（事務局案）の説明資料」に関して若干の要望を述べさせていただきます。

要望：「地域専門家」の育成と活動の場としての「地域の自然に関する研究会」の振興と「地域の専門家に利用可能な情報システム」の構築を望む。

第3部の第1節1.(4)自然環境データの充実、第3節7.自然環境データの整備の項目において「NPO、地域の専門家」の現状はどう認識されているかについて、若干の危惧があります。まず、一般に認識されるNPOと地域の自然に関する研究会（専門家）は別の構成員と指向性を持つ集団であることについて、認識する必要があると考えます。

前者は構成員も多く社会的に注目される事の多いものです。自然環境に関する一般的な項目についての情報収集能力は、特に量的には高い潜在力を持つと考えられます。ただ、情報の質に関しては過去の緑の国勢調査などで、一般に向けての様々な試みが為されていますが、問題が多いのも事実で、今後の展開についても限界があると考えられます。

後者は高齢化と後継者不足が顕著であり、構成員数も減少する傾向にあります。種の分類と分布を熟知した「地域の専門家」が自然発生し、どこにでも分布する時代は終わりつつあります。まさに、絶滅の危惧される状態です。今日、私たちが利用する情報は、現在も過去も、質量ともに、彼等がみずからの興味と目的のため個人として収集したものによるところが大でしょう。彼等は別に生業を持つアマチュアを主体に構成されています。現状としては、行政機関、大学等に所属する研究者、民間の調査会社などが行なう自然環境に関する調査検討等で、表面には現れなくとも彼等の情報と経験、場合によっては現地調査にいたるまで依存していることは事実です。近い将来、彼等の情報が枯渇または著しい減少をきたすであろうことは大変大きな問題です。

絶滅にいたる原因は、教育内容の変化など社会的要因も大きいと考えられます。しかし、このような人々は一般的な環境教育で育成できる人材ではありません。一般的な環境教育で達成されるのは「自然の不思議に興味を持つ」という段階でまででしょう。その先の知識と技術を身につけ、先人の持つ情報を伝える場として機能するのは「地域の自然研究会」の活動であり、「地域の自然雑

誌」にはその購読と投稿をつうじて成長の動機付けに有効です。これらの充実をはかることが「地域の専門家」の育成に最も有効な手法と考えます。その為には、なんらかの助成（例えば、静岡の篤志家が実際に行っている雑誌の買い上げと無料配布）が望まれます。

一方、社会的要因以外に「地域の専門家」が抱える要因もあります。従来の活動の領域(種の分類と分布に関する発見や記録)は明らかに縮小しています。それは、みずからの活動が必然的に招く結果として 分類の完成と高度化(新種発見の機会の減少、DNA解析等の導入) 種リスト・分布図の完成(新分布発見の機会の減少)が起きるからです。それに代わる活動領域の拡大があることも事実です。例えば、全国的に進んでいる県別のRDBの編纂は従来からの活動と主張が社会システムに取り入れられるという喜ばしい出来事です。しかし、社会的意義があろうとも、「自然の不思議に興味を持つ」という根源的な動機からは外れているのも事実です。活動すればするほど本来の動機から外れてくるというのでは、「地域の専門家」の育成は期待できません。今後、活動領域の拡大は根源的な動機の延長線上に求め、より深い方向に向かうべきでしょう。すなわち、「地域の専門家」でも分類の不完全な分類群へ挑戦する、地域に密接に関連する生態学分野への参入などが想定されます。そのために、高度化した知識と技術の利用と修得を「地域の専門家」でも可能にするシステムの構築が望まれます。例えば、「民間でも利用可能な分類・生態関連の文献検索・閲覧システム」を構築することにより、「地域の専門家」の大きな悩みの一つが解決することが考えられます。

第4部第6節生物多様性に関する情報整備・調査研究に関して検討される際に、このような視点を参考にして頂ければ幸いです。